Osaka University Knowledge Archive

Title	社会と宗教意識の変化 : 高度経済成長期とその後
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1990, 16, p. 181-199
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4216
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

社会と宗教意識の変化
――高度経済成長期とその後――

川　端　　亮

社会と宗教意識の変化
――高度経済成長期とその後――

1. 「宗教回帰」現象をめぐって

戦後の日本人の宗教に関する態度を見てみると，つぎの二つの時期で大きく異なるといわれてきた。一つは，1970年頃までで，この時期は，人々が宗教から遠ざかり，宗教社会学の領域においては，「世俗化」の時期といわれた。それに対して，それ以降は，再び宗教に親しみを感じ始める人々が増え，マスコミを通じて「宗教回帰」といわれた時期である。

その根拠として挙げられるのは，文部省統計数理研究所の「日本人の国民性」調査やＮＨＫ放送世論調査所の「日本人の意識」調査などの世論調査による個人の宗教意識の側面からの指摘であり，それについで，新新宗教や「小さな神々」の出現といった宗教集団における現象が報告されてきた。

この「宗教回帰」という言葉は，一般にまで浸透しつつあると思われるが，なぜこのようなことが起こってきたのかという背景，その理由となると，未だ十分に明らかになっていない点もあると思われる。

たとえば，ＮＨＫ放送世論調査所の「日本人の宗教意識」調査においては，「戦後の常識」と呼ぶべきものが揺らぎ始めていることが原因としている。その「戦後の常識」とは，

① しきたりに従うよりは自分を押し通すこと，親孝行や恩返しよりも個人の権利や自由を尊重すること，利己主義的な側面も含めた個人主義の尊重といった社会規範の側面

② 科学は万能であるという合理主義の側面

③ ヨーロッパやアメリカをモデルとした経済大国化を目指すという目標の側面

の３つの観点から，これらが安定性を失い始めたことによって，日本は規範や目標といった点で大きな変動期に入ったという。そして，戦後になって，戦前の日本を徹底的に否定したのは間違いではないかということから，伝統的，日本的なものを見直す動きが基底にあるうえに，変動期の混乱から，人々は宗教に近づいているのではないかと解説している[1]。

また，西山茂は，1970年代以降と，大正期前後の時代情勢の類似から，躍進しているのは，＜霊＝術＞系の新宗教と呼んでいる宗教であり，それらが流行する原因を貧病争による古典的な「剝奪理論」だけでは説明できないという。そしてそこに働く要因として，手段的な志向性と区別された表出的な宗教志向性があり，この意識の変化が「非合理の復権」と結びつき，表出的な神秘・呪術ブームを招いたと考える[2]。

西山の言う<霊＝術>系の新宗教の特徴は，神秘・呪術ブームに支えられたものであるが，このブームの流行の原因として第一に重要視されているのが，第二次大戦以降の経済至上主義的な合理主義の信奉から対極となる非合理主義への変化であるが，これは，単なる反動であるのだろうか。

世論調査の分析は，宗教意識の変化を，西山の説は，宗教集団が強調する教えや実践の特徴をよく捉えているが，なぜ，伝統的考え方や非合理が復活するのか，また，それらによって盛り上がる信仰心や宗教は，世俗化していた時期に人々がもっていた信仰心と同じものであるのか，などの不明瞭な点もあるが，何よりも近年の神秘・呪術ブームを支え，興隆してきている宗教集団に見られる若年層の増加の理由について何も語っていない。宗教は一般に年をとるほど信じやすくなるものであるという常識があるが，その中高年層が保持する信仰心と同じものを若年層もまた持つように変化してきたのであろうか。

以上のような問題を社会構造の変化という点で整理し直すことを端緒として，宗教回帰以前と以降の宗教意識の変化を明らかにすることが本稿の目的である。

2. 社会変動と宗教

宗教が新しく興隆したり，衰退したりするときには，その変化が大きければ大きいほど，社会変動の影響が見られるであろう。というのは，宗教状況が大きく変化する際には，それだけ多くの人々において，宗教的な欲求が高まったり，減少したりするわけであるが，宗教的な欲求を刺激する要因としては，大きく分けて，剝奪とアノミーの二つの要因しか確立されていないと思われるからである[3]。そして，これら二つは，社会変動によって生じることが多い。より厳密に言えば，社会構造の中の，上下関係や支配－服従関係などの社会の不平等構造の側面が時間的に変化する社会変動によって，下降移動し剝奪感を感じる人々が生じたり，アノミーに陥り，そこから抜け出すために宗教に入信することが起こる一方で，逆に人々が剝奪やアノミーを感じなくなって宗教が衰弱したりするのである。

幕末以降の日本の宗教状況を鑑みても，宗教ブームと呼ばれる幕末から明治維新の時期や第二次世界大戦後などは，急激な社会変動によって宗教が影響を受けた典型的な時期である。

これらの時期と比べると，1970年代以降に生じた変動は，非常に緩やかなものである。そして何らかの社会変動が生じたとは考えられていたが，それが社会の不平等構造の変化であるという点は，明らかではなく，主に社会意識の変化が指摘されてきた。それは，宗教のみに限らず，たとえば政治における「保守回帰」や生活満足度における中流意識の増大などである。

その変動を経済の側面からもっとも分かりやすい言葉で言えば，オイルショックを境に高度経済成長の時代から低成長の時代への変化と言える。低成長の時代には，公害の問題や地価の高騰，実質賃金の伸びの低下など暗い側面が見い出せるが，それは高度経済成長の時代に達成された物質的な豊かさと比較すれば，決定的に悪いものではない。一方，宗教に入信する人の動機には，何かしら悪いことがあって入信するのであろうという暗黙の前提がある。世の中は，決定的に悪くなっているわけではないにもかかわらず，悪いことがあって入信する人が増えるのはなぜか。この矛盾を説明することが，近年の問題であったといえる。この問題を解くために，一方の経済を含む社会全体については，深く検討されず，他方の宗教への入信動機が変化してきているという考察がなされてきた。

要するに問題として残されていた点は，1970年代に生じた社会変動が，社会の不平等構造の変化であるということが明らかではなかったことである。したがって，考察の対象は主に，宗教を信じる人の意識，入信動機に重点がかかりすぎていたのである。

しかし，この社会変動の問題に一つの解答を与えてくれたのは，1955年から85年までの10年ごとの社会階層と社会移動全国調査（ＳＳＭ調査と略す）の結果である。その調査結果を概括して直井優は，広く信じられていた，日本社会が飛躍的な経済成長とともに平等な社会を達成したという神話は，1975年までのデータにおいては当てはまるが，75年から85年の変化を調べてみれば，日本社会の階層の固定化もしくは格差の拡大の傾向，控え目に言って，平等化の傾向が停滞していることをつぎの三つの点から示した[4]。

まず第一に示されている点は，出発点における平等（開放化）で，今まで「産業化は人員配分の開放性と流動性の増大をともなう」と見られていた。しかし，流動性の指標である事実移動量で見れば，1955年から65年においては農業の大幅な縮小によって著しく高まったが，その後は横ばいか低下している傾向にあり，開放性については，修正安田係数で見ると産業化がある程度進むまでは上昇したが，75年から85年にかけては低下している。

つぎに出発点から到達点に至る過程の平等（業績主義化）においては，従来は，学歴の平等化や親の「七光り効果」が言われてきた。確かに学歴は全体に高学歴化したが，父－子の学歴移動の純粋移動率を見ると，55年から65年に生じた増加はその後持続していない。また，「七光り効果」を父親の職業が本人の現職に及ぼす直接的効果と考え，父学歴や本人学歴などの本人の現職に及ぼす効果を取り除いたパス係数を調べてみると，55年から85年にかけてその直接的効果は減少する傾向にはない。

第三に，到達点における平等（平準化）においては，経済成長によって，国民所得水準は増大し，賃金も生活水準も飛躍的に上昇したのは事実である。しかし，所得の格差を勤労者世帯のジニ係数で見れば，70年までは減少し格差が縮小していることを示しているが，それ

以降はジニ係数に変動は見られるものの増加の傾向も減少の傾向も示していない。また，所得，学歴，職業威信から構成される社会的地位の一貫性の程度をクラスター分析してみると，55年から75年にかけては，非一貫クラスターの全体に占める割合が顕著に増大しているが，それ以降，その増加の率は減少している。さらに所得の尺度を変えて地位を構成すれば，非一貫クラスターの率も半分以下に大幅に減少しているという分析結果もある。

この日本社会の社会的資源の配分や獲得機会の不平等構造によって，ある人々にとっては上昇移動のチャンスが減少する。このような閉塞感のある社会では，剝奪状況は生じないのであろうか。高度経済成長期の，人並みに豊かになっていくことがいわば当たり前となって人々に意識される状況にまで達しながら，70年代以降の人並みに豊かになりたいという欲求が明確に意識されないが充足されにくい社会において，人々は一部の属性的理由や運によって上昇した人々と自分を比べることによって，剝奪感を感じないであろうか。このように豊かになれると信じ，一時期確かに平等化が進んだために起こる剝奪感は，相対的剝奪として考えることができよう。このような点から現代の宗教意識の変化を考え直す前に，1970年代以前の宗教意識について整理し，それと比較することによって変化を考察する。

3. 世俗化期の宗教

高度経済成長期に宗教は衰えたといわれ，その後再び，宗教に近づく人々が増えたといわれる。しかし，ここで言われる「宗教」とは，同じものを指すのであろうか。ここではまず，宗教意識の点からこの問題にアプローチしてみよう。

宗教意識を問題とする場合，まず，それを一次元的に捉えるかそれとも多次元的に考えるかという問題がある。そこで，一次元的に捉えた宗教意識で，1970年代以前と以降の変化を説明することを試みよう。

1970年代以前の世俗化が進行したといわれる時期について，宗教意識の点から世俗化の進行に疑問を投げかけたのが，鈴木と佐々木である[5]。彼等は，「日本人の国民性」調査の中から，「あなたは，何か信仰とか信心とかをもっていますか」という質問項目で宗教心を測り，コーホート分析した。時代の効果においては，1973年に若干の落ち込みはあるもののその効果は大きくなく，コーホート効果に関しては，女性にかぎりある程度見られるが，男女ともあまり大きくないのに対して，年齢の効果が非常に大きいことを示した。

しかし，加齢の効果が大きいという結論では，近年言われる若者が宗教に近づきつつあるという現象は全く説明できない。それは，「あなたは，何か信仰とか信心とかをもっていますか」という質問項目で宗教心を測ったために生じた結果であろう。この分析は，アメリカ

とオランダとの国際比較を目的とし，いずれの国も日本と同様に高齢者ほど宗教を信じているが，それが日本と異なり，アメリカの場合はコーホートの効果であり，オランダの場合は，時代効果とコーホート効果の両効果の影響であることが示されている点で非常に価値があるが，宗教を一次元的にしか測定しえなかったために，本稿で問題としている近年の動向を反映しえなかったし，世俗化も否定する結論となったのである。近年盛んとなってきた宗教意識については，後に論じることとして，1970年代以前の宗教意識に着目して，さらに考察してみよう。

この時期においては，宗教は年をとるほど信じやすくなるものと言われ，現象的には宗教を信じる人は漸減する傾向にあった。社会的には日本の産業化が順調に進み，大量生産・大量消費が可能となり，少なくとも物質的には人々が豊かになり，生活に満足している人々も多くなった時期である。このような社会は宗教にどのような影響を与えるであろうか。

先にもみたように，社会を全体としてみた場合には，その構成員の所得も学歴も飛躍的に上昇する一方で，その不平等構造である階層構造が，その格差を縮小する方向に変動するこの時期においては，人々は，物質的豊かさを享受し，医学の進歩によって病気も治癒しやすく，それらから派生的に生じる争いごとも少なくなるなど剝奪的な状況は少なくなる。また，近代化，産業化が順調に進展することによって，金銭的な成功や社会的地位を得るという目標が確立する一方で，そのための機会が均等化し，業績主義化の原理も衰えることなく，結果の平等も達成されつつあり，価値規範も確立していたために，アノミーに陥る要素も少ない時期であった。つまり，社会の側から宗教に対して，特別に刺激する要因が少なかったといえよう。したがって，剝奪やアノミーを理由として宗教に入信する人々が大きく減少する反面，社会からの影響が少なくなるので，そこでは宗教の中で社会変動の影響をもっとも受けにくい部分，すなわち宗教の基層と考えられる部分が表出してくると考えられる。

古くは，和辻哲郎が指摘したように，日本の文化は，新しいものを取り入れる一方で古いものを保存することによって重層的な構造ができ上がっており[6]，また，丸山真男が言うように，その中で一つの座標軸や体系とはならず，断片的ではあるがおどろくべく執拗な持続力をもっている執拗低音（バッソ・オスティナート）があるという考え方[7]を宗教にあてはめれば，より上層の創唱宗教や民俗宗教を支える基層があると考えられるであろう。この古くより連綿として受け継がれ，時には現われ，時には潜行して保持されてきた基層の信仰が，社会からの宗教に対する影響の少ない1970年代以前に表面に出てきたと推察できよう。

この基層がどのような宗教意識なのかを考えれば，その中核をなすのは，恩の意識であり，祖先崇拝，現世主義であると思われる。

第一の恩の思想は，仏教思想の恩が，日本において文化の基層の働きによって変容されたものである。これは，「天地の恩」という言葉で表わされる，漢訳仏典の主要なものには挙げられていない日本的なもので[8]，見田宗介が「<原恩>の意識」としてして取り上げたように，何ごともなく生きていられることに対しておかげさまでと感謝する心情であり，その対象は，普通は明確に特定の対象が意識されておらず，神仏一般であり，諸霊であり万物である[9]。したがってそこには，アニミズム的心情も浸透している。そして，「おかげ」を感じる対象として最も象徴化され，一般に流布しているものが天地なのである。

1970年代は，不幸な状況にある人が宗教を信じるのではなく，幸せな人々が信じる宗教であったといえよう。「国民生活に関する世論調査」の結果（図１）を見ても，宗教を信じる人の割合が高い年配者ほど生活に対する満足度も高い（特に70年代前半）。

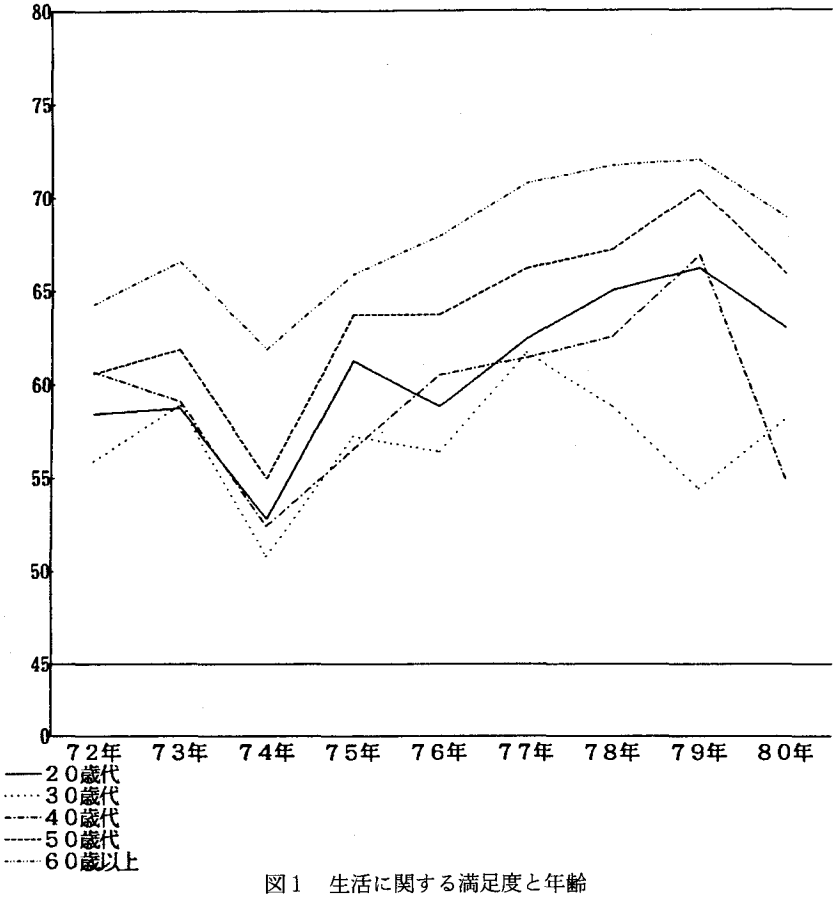


図１　生活に関する満足度と年齢

・グラフは，各年代の「十分満足している」と「一応満足している」を足した割合
・『「国民生活に関する世論調査」の意識動向の分析視点，分析手法，適用例の研究』1986年，内閣総理大臣官房広報室，122，123頁の資料より作成。

また，少なくとも当時は年功序列の社会であった日本では，収入について言えば，年配者は若者に比べて多くの収入を得ることができ，満足度が大きいであろう。また，職業に関しても，年をとるほど職業上の役職に就く可能性が高くなり，所属集団や組織，あるいは地域社会における発言権や他者を自己の意志に従わせる有形無形の威信，勢力も保持する人が多くなるであろう。このような年配者たちは，生活に満足する比率が高くなり，それにともなって，＜おかげさまで＞と感謝する心をもっていたであろう。このような感謝の心，言い換えれば恩の意識は，アニミズムを基に諸霊一般のみならず祖先も含まれ，＜ご先祖様のおかげで＞という感謝の心も当然強くあったであろう。この祖先崇拝と汎神論的な信仰心がまず第一にこの時期の信仰心の特徴として挙げられる。

そしてこれらの生活に満足している人々にとっては，順調な生活が何よりも大切という現世主義が見られるであろう。この現世主義は，そもそも日本文化の特徴として指摘されてきた点である。中村元は，現世主義について以下のように述べている[10]。

> 日本人の思惟方法のうち，かなり基本的なものとして目立つのは，生きるために与えられている環境世界ないし客観的諸条件をそのまま肯定してしまうことである。諸事象の存する現象世界をそのまま絶対者と見なし，現象をはなれた境地に絶対者を認めようとする立場を拒否するにいたる傾きがある。

このため，神仏や諸霊と人間の間の距離が近く，「人を神に祀る風習」としての祖先崇拝の原理が根強く保持され，山や川，草木，巨石からかまどにいたるまであらゆるものに霊が宿り，またその霊が人間の身近にいて，われわれを見守っていてくれるという神人不分離の考え方が成り立つのである。このような祖先崇拝，汎神論的な信仰心の基となる現世主義は，生きているこの世を肯定すること，つまり生活に大きな不満を持っていないことが条件である。したがって，1970年代以前の時期に以上のような基層の信仰が表出していたと考えられるのである。

そしてこの基層の信仰は，もっとも一般的な日本人の宗教心であり，1970年代以前において，既成の宗教集団においても新宗教においてもこの信仰を基底とし，上に挙げた要素を取り入れて成り立っていたと考えられるため，「あなたは宗教を信じていますか」という一次元的な尺度で測られる宗教心であると思われる。したがって，このような信仰心は，先のコーホート分析の結果で述べられていたように，日本においては，時代や世代の変化をあまり受けず，年齢の効果に大きく影響されるもので，現在も中高年層が保持し続けている信仰であると考えられる。

4. 1970年代以降の宗教意識

戦後の日本社会は,「一億総中流化」という言葉が示すようにみんなが等しく豊かになるということを信じ,成長してきた。したがって,社会変動と宗教を結ぶ,一つの有力な理論である剝奪理論によろうとすれば,人々が等しく豊かになれば,剝奪される人も減って宗教がはやらなくなるという結論になる。それゆえに,1970年代以降の宗教入信者の増加を説明するには,貧病争という古典的剝奪理論ではなくもう一つの有力な理論であるアノミー論によって説明されてきた。

最初に紹介したのＮＨＫ放送世論調査所がまとめた『日本人の宗教意識』においては,高度経済成長期において信じられていた規範が揺らぎ,アノミー状態になるのと共に伝統意識が復活し,それに伴って宗教意識も興隆を見るようになったという説明である。この説明の問題点は,アノミーになった後に以前の規範にとって代わるものが,直接宗教なのではなく,それまでことごとく否定してきた伝統意識が,再び規範として復活してきたのであり,それ

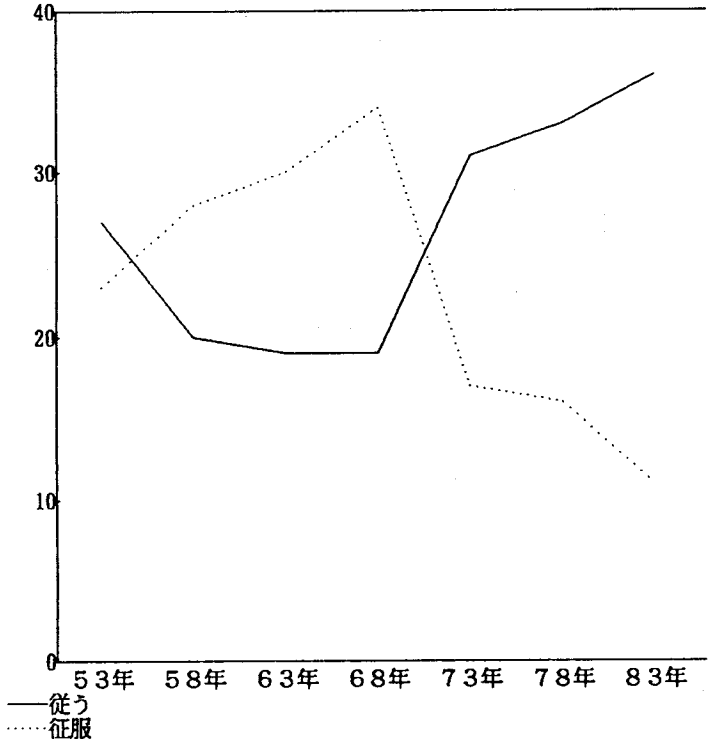


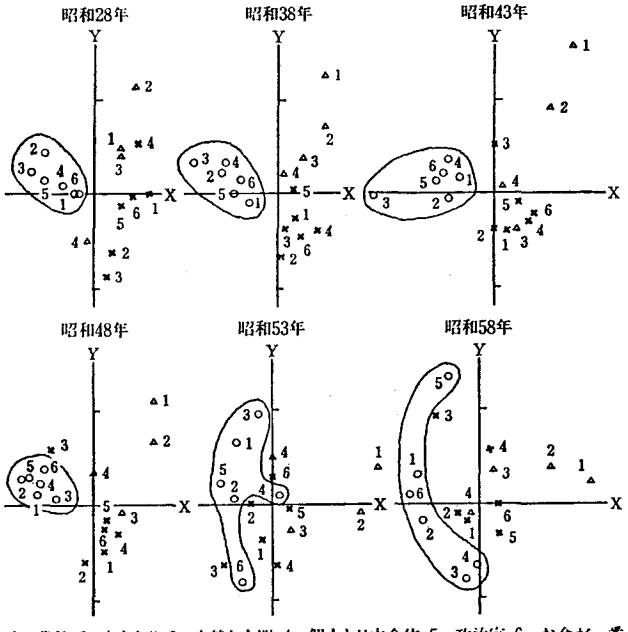
図２　自然と人間の関係

・林知己夫『日本人の心をはかる』1988年,朝日新聞社,58,112頁のデータより作成。

に伴って伝統意識と強く結びつく宗教も再び人々を惹きつけるようになったという点にある。伝統意識と従来の宗教が結び付きあっているということに関しては，問題はないが，本当に伝統意識が復活しているのかということに対しては，疑問が生じる。

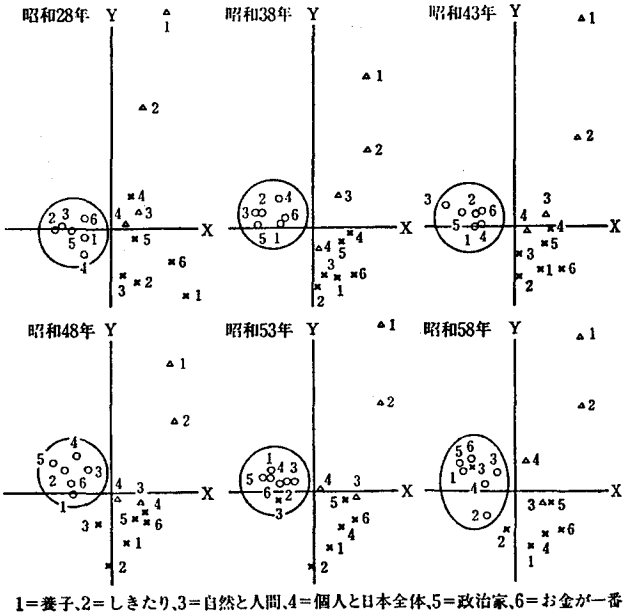
林知己夫は，国民性調査の結果から，「伝統保守」へのUターンとみえる現象は見かけ上のものであって，実は，従来の考えの筋道の崩壊の前兆であったと主張している[10]。単純集計のレベルで見れば，確かに伝統回帰の流れに則っている。たとえば，自然と人間の関係について，「自然に従う」，「自然を利用する」，「自然を征服する」の3つのうち，もっとも近いものを選んでもらうという項目において，1953年から83年までの5年ごとの結果を見れば，「従う」の比率は68年を境に急上昇している。逆に「征服」の比率は，同じく68年を境に急低下である。また，「自分が正しいと思えば世のしきたりに反してもそれを押し通すべきだと思うか，世間のしきたりに従ったほうがまちがいがないと思うか」という質問項目においても，53年から73年までの20年間はほとんど変わらず「押し通せ」が40％前後，「従え」が34％前後であったのが，78年には，「押し通せ」が30％，「従え」が42％，83年には，29％，39％と逆転している。これらと他の四つの伝統対近代に関する質問項目を数量化Ⅲ類によって分析してみると，単純集計だけでは分からなかったことが見えてくる。20～24歳の若い年齢集団をとりだした図3と，日本人全体の図4とを比較してみれば，1973年までは，どちらも同じく，伝統的回答（図中の○印）は一つに，近代的回答（図中の×印）はそれで一つにまとまっており，伝統と近代ははっきりと異なるものとして回答されていることが分かる。しかし，78年には，日本人全体では，ほぼ以前と同じ回答パターンが保たれているが，若者の間では，伝統的な意見がばらつき，一つに固まらなくなり，83年には，さらに崩れてしまう。つまり，若者においては，伝統対近代という構図は，成り立たなくなってきているのである。このように，個々の質問項目の単純な集計だけでは伝統回帰と見えたことが，複数の質問間の関連を見る分析によって，若者の間においては，伝統回帰ではなく，その枠組が崩れ，伝統－近代の枠組によってこれらの質問に回答しているのではなく，別の棒組で，あるいは一つ一つの質問ごとに統一された考え方の筋道なしに答えていることが分かるのである。83年の30才以上の人々の間では，まだ，伝統対近代の枠組がかなりはっきりと現われているが，将来はこの枠組が崩れてなくなっていくのではないかと林知己夫は，予測している。

この分析結果を見れば，高度経済成長時代の価値観が動揺し，その後の新しい時代の価値観として以前と同じ，一般に言われているような伝統意識が復活しているかどうかは疑問であり，特に若者においては，もはや近代に対する伝統という考え方があるとは言えない。したがって，伝統意識と共に宗教も復活しているとは言えないし，特に近年の宗教を信じるものとして，若者が多くなっていることに対しては，何ら説明とはなっていないであろう。



1＝養子 2＝しきたり 3＝自然と人間 4＝個人と日本全体 5＝政治家 6＝お金が一番

図3　20～24歳の伝統対近代についての意見構造の変化



1＝養子、2＝しきたり、3＝自然と人間、4＝個人と日本全体、5＝政治家、6＝お金が一番

図4　日本人の伝統対近代の配置図

・図3・4は林知己夫『日本人の心をはかる』1988年，朝日新聞社，133，116頁より引用。

つぎに新新宗教をめぐる論稿について検討してみる。

西山茂は，高度経済成長後の日本人の呪術や宗教に対する意識の変化を裏付ける資料として次の三つを挙げている[12]。

まず第一に，先にも挙げた文部省統計数理研究所の「日本人の国民性」調査やＮＨＫ放送世論調査所の「日本人の意識」調査に示された統計数字上の「宗教回帰」現象。

次に，1970年代以降の若者を中心に「ミステリー・ブーム」が，テレビ，映画，ベストセラー本の動向に見られること。

これに次いで，1980年前後からミステリー雑誌や「精神世界の本」が静かなブームになっていること。

以上の三つの事柄による意識の変化の結果，新新宗教と「小さな神々」が台頭してきたことが，高度経済成長後の宗教状況の注目すべき変化であると述べている。そしてその原因として，高度経済成長期を貫いた「モダニズム」という「合理的な」エートスによって実現された社会は，一面でわれわれに「豊かな」社会をもたらしたが，それと同時にわれわれに人間的紐帯の喪失や管理社会化，高齢化社会の諸問題など，必ずしも幸福のみをもたらさなかったことが明らかとなり，合理的なモダニズムに対する不評が高まって，かえって非合理が復権してきたからであると考える。

このように西山は，近代化に対する価値観の変動から宗教状況の変化を捉えており，その点では非常に価値あると思われるが，非合理がモダニズムへの反動としてしか述べられておらず，疑問が残る。

また，西山は，高度経済成長後の時期において注目する宗教集団を＜霊＝術＞系の新宗教と呼び，「神霊・人間霊・動物霊とその構成素・作用などを操作し，それらの実在を証明したり，病気治しなどの除災招福をはかったりする反復的な霊術を，救済や布教の主要な武器とする新宗教[13]」と定義しており，この「反復的な操霊主義は基本的にはわが国の民間信仰としての生神信仰やシャーマニズムの伝統に根ざしている[13]」といい，神秘性・呪術性を強調する一方で，高度経済成長期以前との連続性にも注目している。

その点をさらに強調しているのが島薗進である。西山の言う＜術＞の宗教の要素は「けっして70年代になって初めておこるのではない[14]。」むしろ昭和初期以来，特に戦後の２，30年のことであると指摘し，民衆の都市生活においては，アニミズムの活性化，あるいは神秘・呪術の活性化がより長期的な傾向として存在し続けたと考える。その要因として，一つは，知識人やエリートによって，価値が低く迷信的であると見なされていた民衆宗教的な神秘・呪術への関心が，近代の民衆の経済力の上昇と共に，70年代になって知的教養をもつ中産階級の文化に強い影響を及ぼすようになったことを指摘する。また二番目には，科学的思考法

の浸透により，因果的に事物や心身を意識的に統御しようとする態度がひろまる一方で，複雑化・専門化した科学的知識の多くは，一般の素人の理解を超えるようになり，さしあたり必要な範囲で手近な因果関係が重んじられ，実用主義的，功利主義的判断が優位を占めることである。そしてこれらの考え方が，体系的な世界観よりもアニミズムやアニマティズムと適合的であると述べている。

これらのことは，70年前後の民衆の経済力が上昇し，豊かな人と貧しい人との格差が縮小し，等しく平等になると考えられた時期に，また，科学技術が信奉されていた時期に当てはまることではあるが，現在のように不平等の格差が芽生え始め，特別の地位を占める人々が出現し，階層の不平等が進行しつつあり，かつ原子力や環境汚染などの点で，科学に対しての懐疑が蔓延している時期にも適合的な条件なのであろうか。むしろ，1970年代頃までの時期に，島薗の言う2つの要因が働き，基層の信仰のアニミズム的側面が表層に現われ，現在もそれは，ある程度は存続していると考え，現代的な宗教の特徴は他の側面から捉えた方がよいのではないかと思われる。

西山の言う非合理の復権も島薗の言うアニミズムの存続や神秘・呪術の活性化も，伝統との連続性を一面で指摘していると思われる。

確かに，新新宗教や小さな神々の指導者においては，伝統的な枠組の中で，宗教を考えていると推測されるし，熱心な信者たちもそれらの考え方を身につけていくかもしれない。しかし，一般の信者のレベルで，しかも入信するかどうかの不安定な人々の間では，もう少し異なる考え方があるのではないだろうか。特に，西山も島薗も＜霊＝術＞系の新宗教に若者がかなりの割合を占めることを認めておられるが，伝統－近代の考え方の筋道を失った若者が，どのような考え方の枠組でもって宗教を捉えているのかに対する解答が，「非合理の復権」や「表出的」な宗教志向性だけでは不十分であろう。確かにそれらと宗教は関連があるにしても意識の相関だけでは未解明の部分が残る。

5. 若者と宗教

若者の中で，宗教的なものに親しみを感じるものは増加している。占い・易・お守り，お札のような神秘的・呪術的な事柄を行なうもの，信じるものの割合がかなりの程度高いのは周知の事実である。しかし，「国民性調査」や各種の世論調査で測定している「宗教を信じている人」とは重なっていない。つまり，「宗教を信じている」という項目で測定される一次元的意味での，言い換えると伝統的意味や基層の信仰としての「宗教心」では測り切れない宗教的心情を若者はもっているのではないかと推測できる。

若年層は，日本のように，加齢にともなって収入も増え，社会的地位も高くなる社会においては，一般的に社会的地位が低い。そしてその社会で，少しでも上昇するために幼い頃からの厳しい受験戦争や職場での昇進争いなどという過酷な環境におかれ続ける。ところが，学校での点数という平等な競争が終わって，いざ社会に出てみると，そこではまず出発点において既に平等でない。先に挙げたＳＳＭ調査の結果は，男性の場合であるが，女性の場合は学校の中にはない性差別の問題が加わり，さらに状況は厳しいものであろう。また，出発点での不平等に耐え，努力し頑張ってみても，そこは必ずしも業績主義の社会ではなく，「親の七光り」が通用するのである。さらに従来と比べれば，高齢化社会の到来で，ますます業績を上げても報われないことが多いであろう。

経済が成長し，物質面での満足が得られた後の，より高いレベルでの欲求が充足されない生き甲斐喪失という派生的剝奪を経験するということが，若年層を含む全体的な状況として描かれ，「物の時代」から「心の時代」へなどといわれてきた[03]。しかし，社会の不平等構造の格差が広がる時代には，不平等を被る人がいる反面，過度の報酬を受ける人がいる。それも業績主義でのみ評価されていた学校の中から，社会に出てみると，急に，家柄や親の地位，財産によって，不当に利益を得る人を目の当たりにすることになるであろう。ここに，今までは比較して平等だと思っていた人が，不当な利益によって地位上昇することにより，急に剝奪感を感じる相対的剝奪が生じる[06]。

社会構造の変動を考えれば，このような入信動機が考えられるであろう。しかしこのような剝奪感は，一般の人々においては，今までは比較の対象が明確に不当な利益を得ているという認識はなかったであろうから，「何となく」とか「自然に」などという目的のない入信動機や漠然とした「不安」となって現われると考えられる。

相対的剝奪は，今までは比較もしなかった地位の人と自分を比較することによって感じる剝奪感であり，急に地位が上昇した人を自分と同じ所に引き摺り降ろすことも，自分が同じ地位にまで上昇することも，社会の階層構造上不可能であるから，この剝奪感から脱するのは困難なことである。現実には，土地や株などの労せずして利益の得られる財産のある人とせめて消費の面だけでも同等となるように，持ち家購入を諦め，高級車や家具などを購入する「やけっぱち消費」といわれる消費活動に走る人々も見られるであろう。また，一方では諦めたり，現世に頼っても報われない不充足感を力のある神仏に頼ることによって解消しようとすることもあると思われる。表面的には，神仏依存に見えるこれらの人々が，易や占いに頼り，宗教を信じて霊術を身につけることによって心の安らぎを得ているのは，現世での相対的な比較をやめるからであろう。現世における自分と上位者との格差は，人間と霊性との間の差を知れば，実に小さなものと感じられるはずである。このように，現世への志向が弱

くなり，来世への志向が強くなるところに解決の道があると思われる。

このような状況を世論調査の結果の中に探してみると，ＮＨＫの放送世論調査所の「日本人の意識調査」の1973年と78年の比較の中で，「あの世，来世」を信じている人の割合が，16歳から19歳では8.9％から18.2％へ，20歳から24歳では，4.6％から14.2％へ，25歳から29歳では，5.0％から8.6％へといずれも有意に増加していることが見て取れる[17]。また，この傾向は，調査は違うが，読売新聞の1988年の意識調査においても「あの世，来世」を信じる人は，20歳代で17％と，高い率を現在も保っていることが分かる[18]。もちろん，いずれの調査においても70才以上の人々が「あの世，来世」を信じる率は，これらの数字と同じ位か若干高いが，そこには増加の傾向が見られず，「あの世，来世」が現実に迫りつつある人々と若年層とではその意味が異なるのであろう。

ただ，この来世志向は，現在の神秘・呪術ブームを考え，またこの神秘主義が，宗教的な体験にもとづき，その中から自分と宇宙を一体化するという神秘的な啓示を感じるというものではなく，「現実の世界で合理的に説明できないようなものをすべて神秘的なものの枠組の中に括って，それが人間の生活を底のほうで動かしているんだという錯覚・幻想[19]」に過ぎないという指摘などを考えあわせると，超越的な絶対者への信仰ではないが，1970年代以前の現世主義に支えられた宗教意識と比較すれば，その色彩が濃いということである。

6. 終　わ　り　に

「宗教回帰」現象をめぐる論稿は，いくつかの混乱があり，それらは相互の関連はあるにしても，明確に分けて考える必要がある。

まず第一に，宗教を信じる人の比率の増大とある種の宗教集団で見られる若年層の比率の増大である。宗教の信者は，主にアニミズムや恩の意識を中核とする日本人の基層の信仰を受け入れている中高年層である一方，若年層は神秘・呪術ブームを基底にもっている。したがって，各種の世論調査で報告される易や占い，お守りやお札に肯定的な若者の増加やミステリー書・映画・テレビ，「精神世界の本」などに肯定的な者は，宗教の信者と重なり合う部分が少ないと考えられる。

つぎに，伝統意識に関してであるが，これも中高年層においては，合理主義的モダニズムの価値観を支持し続けた高度経済成長の時代が終わり，不幸な問題点が噴出した時に元の伝統的価値観に頼ることはあっても，伝統的価値観を身につけたこともない30歳以下の世代においては，伝統に回帰するとは考えにくい。若年層では，高度経済成長期以降，伝統－近代の考えの筋道が崩れ，新たな志向の枠組の中で，神秘・呪術ブームや宗教が捉えられている

と考えられる。

第三に，1970年頃から，それ以前の平等化社会の実現への傾向が止まり，階層構造における不平等への萌芽が見られだしたことである。これによって特に社会的に地位の低い若年層が，相対的に剝奪を受け，中高年層の現世主義的宗教心とは異なり，来世志向がより強い宗教を，神秘・呪術ブームを支持し，形成していると考えられる。

このような階層構造からの言及は少ない。わずかに池田昭がこの視点から宗教ブームを考えている[20]。彼は，1974年頃から急激に鈍化した現金給与総額前年度同月比を景気変動の指標とし，その鈍化と宗教ブームの関連から，剝奪的な入信動機を強調している。1970年代に，低階層と高年齢層，上流階級と若年層の両者に分極化の動きが見られ，その中で特に低階層と高年齢層は，「高度経済成長」神話に失望し，現実的な「物質主義」に向かわざるをえなくなり，その中で特に経済的保証のない人が，病気や人間関係，商売の行き詰りに合うと，苦難からの救済を求めて呪術に走ると考えている。一方，上流階級と若年層，ないしは中流階層のうち，文化的享受を充分に得ていない人が，オカルティズムに走るとしている。

池田の中にも宗教ブームにおける宗教の信者の増大と若年層の増大の分離が十分でない点が見られる。たとえば，彼は宗教ブームの推移のデータとして，関西以西では著名な石切神社の信者数を挙げているが，この神社の信者は，若年層が少なく，中高年層が圧倒的に多いため[21]，宗教ブームを表わしているというよりは，本稿で言う基層の信仰を保持している人々の推移を表わしているといえよう。また，呪術に走る人々を苦難からの救済に帰しているが，現世利益のおかげを得る人々は，ただ単にご利益を求めているのではない。確かに，それまで信心らしいことをしたことがないが，医者の見放した病気やどうしようもない行き詰まりから呪術によって救われる人もおり，そしてその人たちの得たおかげは，強烈なものであるから宣伝効果が高く，人々の目にとまりやすいが，そのようなことは実際のところはそんなにしばしば起こる現象とは思えず，基層の信仰が身につき，何事もおかげさまでという恩の意識が根づいた人々に現世利益はもたらされると思われる。

このように池田の説と本稿の立場は異なる点も見られるが，年齢層のみならず，社会階層の視点から宗教意識を考察するということは必要であり，実証的な研究も可能であるとおもわれる。これらが今後の課題であろう。

引 用 文 献

1）NHK放送世論調査所『日本人の宗教意識』 1984年，日本放送出版協会。

2）西山　茂「現代の宗教運動――<霊＝術>系の新宗教の流行と「２つの近代化」――」大村英昭・西山　茂編『現代人の宗教』所収，1988年，有斐閣，169～210頁。

3）社会変動と宗教に関しては，森岡清美「社会変動と宗教」，同編『変動期の人間と宗教』所収，1978年，未来社，５～26頁を参考とした。

4）直井　優「日本社会の階層変容に迫る――崩れ始めた平準化神話――」『朝日ジャーナル』，1989年４月７日，15号，朝日新聞社，14～19頁。

5）M. Sasaki and T. Suzuki, Change in Religious Commitment in the United States, Holland, and Japan, *American Journal of Sociology,* 1987, Vol. 92: 1055-76.

6）和辻哲郎『續日本精神史研究』 1935年，岩波書店，60頁。

7）丸山真男「原形・古層・執拗低音」 武田清子編『日本文化のかくれた形』所収，1984年，岩波書店，87～152頁参照。

8）岡部和雄「四恩説の成立」仏教思想研究会編『仏教思想４　恩』所収，1979年，平楽寺書店，173～188頁。

9）見田宗介『現代日本の精神構造』1984年，弘文堂，155～157頁参照。

10）中村　元『東洋人の思惟方法３』1962年，春秋社，11頁。

11）林知己夫『日本人の心をはかる』1988年，朝日新聞社，２章，５章参照。

12）西山　茂「戦後新宗教の変容と新新宗教の台頭」，『宗務時報』，1986年，69号，文化庁文化部宗務課，１～12頁。

13）西山　茂　前掲論文「現代の宗教運動」，171頁。

14）島薗　進「現代宗教とアニミズム――民衆宗教の「復興」をめぐって――」第61回日本社会学会大会報告要旨集，1988年，369～370頁。なお，以下の島薗の考え方は，学会当日に配布されたレジュメによっている。

15）たとえば，NHK放送世論調査所編前掲書，106頁，西島建男『新宗教の神々』1988年，講談社，38頁など。

16）相対的剝奪については，森岡清美『現代社会の民衆と宗教』1975年，評論社，17～21頁を参照。

17）NHK放送世論調査所編『第２日本人の意識――NHK世論調査』1980年，至誠堂，462～465頁。

18）「読売新聞全国世論調査」（1988年７月実施）読売新聞1988年８月８日夕刊。

19）山折哲雄・河村湊『宗教のジャパノロジー――シンクレティズムの世界――』1988年，作品社，15頁。

20）池田　昭「現代人の意識――二極化した心模様――」『エコノミスト』1988年11月15日号，毎日新聞社。

21）森下伸也「デンボの神様――石切神社――」宗教社会学の会編『生駒の神々』1985年，創元社，127～128頁。

The Change of Society and Religious Consciousness: During and after the Era of Rapid Industrial Development

Akira KAWABATA

There are many articles about the current religious boom, but most of their authors have overlooked some vital points.

First, it is necessary to make the distinction between the increasing rate of believers and that of the young people who are interested in religious things and become involved in new religious organizations or movements. The greater part of believers are the older people involved who have an underlying religious belief which is comprised of "on" (indebted feeling), animism and this-worldly-mindedness. In Japan, it has been suggested that the aging process influences people to be more religious, but in fact, the older people are actually unconsciously involved with this belief with an increase of age. In contrasted to the older people, the younger people are not influenced by this belief. Therefore, their interest in religious things must result from other reasons.

The second problem is the relation between the current religious boom and traditionalism. Certainly a correlation can be seen among the older people between religion and traditionalism, but since the 1970's traditionalism as opposed to modernism as a way of thought is not to be found among the young people. So the religious consciousness of the young people can not be understood within the concept of traditionalism.

The third viewpoint we need to be concerned with is the change in social stratification. Religion is shaped by the stratification system of society but many researchers of religion in Japan have not considerd this, even as a given fact. Post-war Japan has made rapid progress in the economy and this development has caused large changes in the social structure. The allocations of rewards in society was more equal from 1955 to 1975. In that period people were materialistically richer and satisfied, deprived people were fewer and religion had lost strength. However, from about 1975 the inequality within social stratification has increased gradually. As a result, the young people, who are generally of a lower status, feel relatively deprived in comparison to those persons who have gained higher status through the power of his parents or／and their property. These deprived young people thus stop comparing themselves with other persons in this world and instead tend to try to see themselves in relation to the strata of another world making them rather that-worldly-minded. Under these conditions they become interested in the religious and religious activities.